

目的 前回、平成3年に開催された日本家政学会第43会大会において、「小学生の子供部屋に関する意識調査」の表題にて、住宅計画における「子供部屋」の在り方を再考するために、小学生の住生活に関する意識と実態を調査し、結果を発表した。

今回はそれに引き続いて、小学生より更に「勉強部屋」として個室を利用する度合いが高いと考えられる中学生の、住生活及び、それに関連する生活について調査を行い、住空間や住環境及び、それらに関する小学生との比較等を行ったので報告する。

方法 東京都内及び生活圏を共有する近郊都市部を対象に、計8校の1年から3年の中学生に直接配布・直接回収によるアンケート方式で行った。調査時期は、平成4年11月から12月である。

結果 (1) 子供部屋の所有率は、前回の小学生の調査では、自分「専用」の個室を持っている子供が約2割程度であったが、中学生では約6割と大幅に増加した。「専用」を希望する率は9割以上で、その理由としては、静かに勉強できるから(約5割-小学生約3割)親がうるさいから(約3割強-小学生約2割)自由に遊べるから(約6割-小学生約7割)であった。(一人で多答有り)また、自由記述で、プライバシーの確保に関する理由が多く見られた。(2) 勉強を自分の机ですると答えた生徒は、「専用」で6割強で、共有、子供部屋無しに比べやや多かった。また、勉強時間についても同様の傾向を示した。(3) 子供部屋にある物については、「専用」で電話が約2割、テレビが約3割であった。これらの物を置いている生徒の勉強時間は、置いていない生徒に比べやや少なかった。